

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成26年8月28日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 農学研究科・応用生命科学専攻

職名・学年 准教授

氏名 中川好秋

助成の種類	平成26年度・研究者交流支援・国際研究集会発表助成／一般	
研究集会名	第13回 IUPAC国際農薬化学会議	
発表題目	Rational design of ecdysone agonists based on the ligand-receptor interaction	
開催場所	アメリカ合衆国 カリフォルニア州 サンフランシスコ, マリオットマーキス	
渡航期間	平成26年8月8日 ～ 平成26年8月16日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円
	使用した助成金額	200,000 円
	返納すべき助成金額	0 円
	助成金の使途内訳	航空運賃:
滞在費など一部:		49,190 円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回の国際会議の会期は8月の中旬(お盆休みの頃)で、航空運賃が非常に高い時期であった。何とか運賃を抑えるために3月中旬にチケットを購入した。それでも日本から直接サンフランシスコに行く場合は、20万を超えていたことから、台湾経由の安いチケットを入手した。渡航先によって支援額に差をつけられているが、時期による差もあってはいいのではないのでしょうか。	

成果の概要

農学研究科・応用生命科学専攻
中川好秋

筆者は、貴財団の助成を受けて、平成 26 年 8 月 10 日から 14 日にかけて開催された第 13 回 IUPAC 農薬化学国際会議(13th IUPAC International Congress of Pesticide Chemistry: 以下 ICPC)に参加し、招待講演を行った。本会議は国際純正応用化学連合(IUPAC)が主催となって 4 年に 1 度行われている国際会議で、これまで、わが国においても 1982 年に京都で、2006 年には神戸で開催されている。農薬化学研究において、日本は中心的な役割を果たしていることがわかる。今回は、2018 年にブラジルのリオデジャネイロで開催予定である。今回の ICPC は、アメリカ化学会(American Chemical Society: ACS)の AGRO(農薬部門)との共催という形で行われ、ICPC への参加者は、第 248 回 ACS 全国大会にも参加することができた。ICPC はマリOTTマーキスの地下 2 階で、ポスター発表、シンポジウム、懇親会が開催されたが、ACS の全国大会は ICPC の会場とは少し離れた(歩いて 5 分) Moscone center で開催された。

ICPC ではシンポジウム、講演あわせて約 1000 題の発表が行われた。通常、このような国際会議では、初日は登録とオープニングセレモニーだけで、講演などは行われませんが、今回は(故)松村文夫先生の 50 年にわたる教育・研究指導を記念したメモリアルシンポジウムが開催された。松村先生は、ウイスコンシン大学、ミシガン州立大学、カリフォルニア大学デービスで教育・研究を行われ、この間、多くの日本人が松村先生の指導を受けた。筆者も 1990 年 11 月から 1992 年の 11 月までの 2 年間カリフォルニア大学デービスでお世話になった。このシンポジウムの企画には筆者も関わり、3 年ほど前に開催が決まった。本来なら、松村先生を前にしてその偉業をたたえることになっていたが、残念なことに、2012 年 12 月に松村先生が急逝されて、追悼の形となった。本シンポジウムでは、日本からは 9 名、アメリカなど日本以外から 12 名が講演を行ったが、筆者も講演者として話をする栄誉を受けた。筆者は、20 年前にデービス松村研で殺虫剤ジフルベンズロンの作用機構研究を行ったが、帰国後は別のプロジェクトを立ち上げたために、その研究は中断し、その後の進展を報告することはできず、20 年前の話と、他の研究者による最近の話題を紹介した。ダイオキシンのレセプター、ギャバ受容体やイオンチャネルに作用する剤、P450、微生物分解、環境科学など多様な発表が行われた。一人あたりの持ち時間は、質疑応答を含めて 20 分であったが、長くなると座長が容赦なく講演をやめるように講演者に伝えた。もちろんその場合は、質疑応答はなかった。時間厳守は日本の学会とは違うところである。この日は、他に農薬に関するシンポジウムは開催されていなかったこともあり、立ち見が出るほどの盛況であった。このメモリアルシンポジウムは午前 8 時



に始まり、午後 5 時過ぎに終了し、直ちにミキサーが行われ、聴衆を含む参加者全員が歓談した。

翌日から開催された ICPC では、ACS の AGRO 部門国際賞受賞者 Ralf Nauen 博士（バイエルクロップサイエンス）の受賞祝賀シンポジウムが開催され、関連の著名な研究者からの講演が行われた。2 日目からは殺虫剤、殺菌剤、除草剤それぞれに関して”Discovery and Synthesis”と”Mode of Action and Resistance Management”のシンポジウムが開催された。筆者は 3 日目（12 日）の午後に、殺虫剤の Discovery and Synthesis のシンポジウムで講演を行った。演題は”Rational design of ecdysone agonists based on the ligand-receptor interaction”で、脱皮ホルモンアゴニストを例にあげて、合理的に農薬を設計する方法についてお話しした。その中で、午前中に行った学生のポスター発表の内容も少し含めた。午前中のポスター発表では、筆者のグループの学生が 3 題の発表を行った。これら以外にも、環境、製剤、代謝、残留、生態系へのリスク評価など、農薬に関するシンポジウムが開催された。筆者は、国際会議における口頭発表の経験はそれほど多いわけではなく、これまでなかなか満足できる講演ができていないが、今回も満足いくものではなかった。ただ、講演終了後に座長が、お世辞かもしれないが、クリアな話だったと締めくくってくれたのは嬉しかった。

最後に、本国際会議への参加を、助成金という形で支援して頂いた京都大学教育研究振興費財団に厚く御礼申し上げます。

